

令和4年度 第3回豊橋市総合教育会議議事録要録

令和4年12月13日 開 催

豊橋市教育委員会

第3回 総合教育会議	
日時	令和4年12月13日(火) 午後2時00分～2時55分
場所	市役所東館4階 政策会議室
構成員	浅井 由崇 市長 渡辺 嘉郎 教育委員 中島 美奈子 教育委員 山西 正泰 教育長 内浦 有美 教育委員 西島 豊 教育委員
事務局	種井 直樹 教育部長 中村 三木也 学校教育課長 白井 泉 学校教育課指導主事 浅倉 淳志 教育政策課長 鈴木 常浩 教育会館長 ほか 4名
その他	傍聴人 4名

議事日程

協議事項

- 1 不登校対策支援をはじめとした教育相談の充実

その他

- 1 今後の協議事項について

連絡事項

次回開催日程 令和5年2月7日(火) 15:00～

(教育部長)

ただいまから令和4年度第3回豊橋市総合教育会議を開催いたします。議題は、不登校対策支援をはじめとした教育相談の充実についてです。

協議事項

1 不登校対策支援をはじめとした教育相談の充実

■教育会館長 協議事項について資料説明

(教育部長)

それでは、ただいまの説明に対するご意見やご質問をお伺いしたいと思います。よろしくお願いたします。

(渡辺委員)

今の説明にもあったように、不登校の数が増えているのは確かだと思います。不登校の要因としては、無気力が最も多いということですが、無気力で不登校とはどのような状態なのでしょう。

(鈴木会館長)

無気力で不登校とは、学校に足を運ぶ力が無い状態の子たちを指します。担任が家庭訪問をして、保護者や本人とも話をしますが、本人にとってもその原因が分からない場合が多いです。

(渡辺委員)

発達障害や心の病気ということでしょうか。

(鈴木会館長)

そういうことではありませんが、原因が明確でないため、ご家庭の方も悩んでいる場合が多いです。

(渡辺委員)

「ええるうむ」での取り組みは、そのような無気力の子たちにもうまく作用するのでしょうか。

(鈴木会館長)

全ての子たちにうまく作用するかどうかは分かりませんが、例えば「ええるうむ」でタブレットなどを用いて興味のあることに取り組むことで、不登校の子たちが来てくれるきっかけになるのではないかと思います。

(学校教育課指導主事)

無気力、不安で不登校となる場合は、突然学校に来なくなるというよりは、まず遅刻が多くなり、教室とは違う場所で過ごすという傾向があります。そして、その子本人もなぜそのようになるのか分からず、説明することもできないため、大人も原因が分かりません。そのような子に対しては、まず一対一で話をすることで、その子自身が安心することが

できます。好きなアニメキャラクターなど、他愛もない話をする事で、それが楽しみになり、学校へ来ることができるようになっていきます。ただし、1時間目から6時間目までいるのは難しいため、例えば給食までの時間を学校で過ごすなど、各学校で対応を行っているところです。

この「ええるうむ」では、少人数での対応となり、常時人がいることとなります。人に聞いてもらえるという安心感や、話をする事で感じる楽しさは、子どもたちの心のエネルギーにつながると感じます。現状の「ほっとプラザ」でも、個別対応することでその子自身の得意なことを引き出すことができていますが、校外だけでなく、校内でもそのような活躍できる場を充実させたいと考えています。

(渡辺委員)

遅刻や欠席が多くなっている子のように、ある子が不登校になるかどうかは、先生にとって分かるものなのでしょうか。

(学校教育課指導主事)

リーダーのような子であっても突然不登校となる場合がありますので、不登校になるかどうかの判断は難しいです。

(渡辺委員)

この「ええるうむ」が対象とするのは、不登校の児童生徒のみですか。

(学校教育課指導主事)

不登校の児童生徒のみではなく、一時的に教室に入ることができない子なども対象となります。

(中島委員)

汐田小、牟呂小の校長と話した際に、今後は学校行事を復活させて、地域との連携も増やしていきたいという話がありました。しかし、学校現場では教員の転勤もあって、学校行事を知らない先生が増えたという課題があるようです。やはり、コロナ禍の影響は非常に大きいものだと思います。学校は勉強を学ぶ場所であるだけでなく、子どもたちにとっては、じゃれ合いも楽しみの一つですが、それもさえぎられてしまいました。コロナ禍での教員や保護者の不安が、子どもたちにも伝わっていった側面があったのではないかと思いますので、無気力や不安に関しては、子どもだけの問題として捉えるのではなく、大人も一緒に考えていく問題だと思います。

2ページ目には、不登校の低年齢化について記載がありました。子どもたちの幼保での過ごし方や、家庭の様子を知ることで、小学校の先生にとってもメリットがあるように思いますので、今後は、幼保と小学校の接続がさらに大事になると思います。今年の夏には、市内の全小中学校の校長先生と、幼保、こども園の施設長の合同研修会が開かれ、幼保小がつながることができました。これをステップに幼保小のつながりを増やしていくことで、不登校の低年齢化という問題に対応できる部分もあるように思います。

そして、資料5ページ目には、不登校児童生徒への対応のめやすが記載されていますが、現場の先生方は、ここに記載されている以外のめやすについても気づかれていますのではないかと思います。忘れ物や遅刻、保護者の関わり、授業、放課、給食の様子など、教室に入れなくなる前に何らかのサインが出てくるものと思いますが、先生もすべてに対応できず抱え込んでいる場合もあるかと思いますが、今後はここに記載されている以

外の例をさらに増やして、不登校の予防的な支援の充実を図っていただきたいと思います。

また、先日、「ほっとプラザ西」の方が、フレンドさんや子どもたちを連れてこども園にきてくれましたが、特に、教員をサポートする立場のフレンドさんが効果的な役割を担っており、非常によい対応をしてくれていました。「ええるうむ」についても、作って終わりではなく、先生をサポートするようなスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー充実させていき、子どもたちがその子らしさや居場所を見つけられる場所にしていただきたいと思います。

(西島委員)

不登校の推移の傾向は、全国的な傾向と比べて、豊橋市で特異な部分がありますか。

(鈴木会館長)

特にそのような部分はありません。

(西島委員)

現状の学校の環境で登校できない子どもたちには、手を差し伸べて、やれることは全てやっていく必要があると思います。

その上で、今後も不登校の数が増えていくことが予想される中で、単に人や場所を充実させるということだけであれば、どこかで行き詰まってしまうように思います。

例えば、無気力や不安という問題についても、それが社会全体の問題なのか、学校という環境の中での問題なのかを考えていく必要があると思います。社会人でも組織に属さずフリーランスで働く人が増えている中で、集団社会と関わらないことでもよしとするのか、集団社会の中で活躍できる人を目指していくのかについては、社会全体の課題を議論して考えなければならないと思います。

社会が変わっている中で、不登校の子どもたちの受け皿を増やすだけであれば、どこかで破綻してしまうのではないかと思いますので、現状への対応だけでなく、今後の社会の動向を見据えたこの先の在り方まで考えていく必要があるのではないかと思います。

(鈴木会館長)

不登校の子が増えてきたことの要因として、保護者の意識が変わってきたことを挙げる学者もいます。

(西島委員)

子どもたちが社会で活躍できる人となっていくためには、単なる受け皿を用意するだけでなく、ここに行くことで、できないことができるようになったというような場所にしていく必要があるかと思います。教育だけでなく、家庭の問題ということであれば、仮説を立てても、教育委員会として取り組むべきことを検討して、改善のストーリーを作っていくことが、解決の糸口になっていくように思います。

(内浦委員)

このような取り組みはぜひやってほしいと思います。その上で、私も西島委員のおっしゃったことと重複しますが、現状は教室に行けない子どもたちが行くところという受け皿にしか見えないため、どのようなケースの場合にここに行くのか、どのようなサポートが受けられるのかについて、具体的かつポジティブな形を示していくことが重要だと思

います。

(教育長)

私自身も県教委に在籍していた頃には、スクールカウンセラーの担当を務めていたことがありますが、学校に行けず電柱にしがみつくと子ども、それをどうすることも出来ずに見守る母親という修羅場のような光景を目にしたことがありました。不登校は、親にとっても心理的な負担が非常に大きい問題であり、できる対策はすべて行っていく必要があると思っています。

当時は県の臨床心理士が、小学校には月1回、中学校には週1回だけ訪問するのみで、子どもの不安解消にはほとんど寄与しませんでした。その子の親に対して教育会館に常駐していた臨床心理士へ相談するように働きかけたところ、その子自身もその子の弟も学校に行けるようになりました。臨床心理士との相談は、親にとっても安心感があり、子どもにとってもしっかりと話を聞いてもらえることで、不安を解消できる機会となります。

また、少し話は変わりますが、中学校では不登校の生徒で、豊橋高校を皆勤で卒業した子がいました。当時の校長が話していたのは、豊橋高校ではその子にあった学びを組み立てており、教員には子どもと同じ目線で向き合い、決して上から目線で向き合わないようにすることを徹底しているとのことでした。現代は、「こうしなければならない」という、かつての教育観では成り立たないと思います。一人一人を認めていくことや、教科書を教えるだけの授業スタイルでは通用しない時代なのだと思います。

(渡辺委員)

不登校の子どもたちが、学校を出てから社会でどのように活躍できるのかが重要な問題だと思いますし、教育現場としてもそのような子を見守っていくことが重要だと思います。

そのような意味で、この「ええるうむ」については非常にいい取り組みなのではないかと思っています。

(市長)

昔に比べて、親も教育に関心があるのだと思います。子どもに本物の体験をさせたいということで、学校を休んでカナダに行くような話も聞きました。それも間違いではないと思いますし、教育にはこうでなければならないという考え方は当てはまらないのだと思います。

教育は人が生きていく力を身に着けるものであり、必ずしも学校に通わなければならないということでもないと思います。

全ての子どもにとって、完璧にカスタマイズすることは難しいですが、なるべくカスタマイズできるように、このような「ええるうむ」の支援も大事だと思います。

(教育長)

「ええるうむ」を作るのと同時に、「こうでなければならない」というような教員の意識を変えていくのも大事だと思います。

(内浦委員)

常駐する教員は一人ですか。

(学校教育課指導主事)

常駐する教員は二人を想定しています。

(渡辺委員)

文科省のデータだと、このような不登校支援により、3割ほどの子どもが学校に通えるようになるそうですが、この「ええるうむ」によって、少しでも多くの子が通えるようになるといいと思います。

(教育部長)

議論が尽きませんが、この「ええるうむ」に関しては、概ね肯定的な意見をいただいたものだと捉えています。最後に市長から本日の会議の総括をお願いします。

(市長)

様々な意見をお聞かせいただき、ありがとうございました。皆様の意見を聞いて、昔とは状況が大きく変わったということを感じました。様々な子どもたちや、考えを持った親御さんがおり、人づくりに対して関心が高い時代なのだと思いますが、どの程度きめ細やかさを作っていけるのかが重要なのだと思います。

この「ええるうむ」については、完成形ではないかもしれませんが、一つのチャレンジとしては概ねご理解いただけたかと思います。これがゴールではありませんので、また様々なご提案をいただきながら、よりよい教育環境を作っていければと思います。

連絡事項

- ・ 次回開催日程 令和5年2月7日(火) 15:00～

(教育部長)

以上で、令和4年度第3回豊橋市総合教育会議を終了します。ありがとうございました。